

宮沢賢治「化物丁場」考

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2005-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉浦, 静 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1362

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



宮沢賢治「化物丁場」考

杉 浦 静

「化物丁場」は、「五六日続いた雨の、やっとあがった朝でした。」「私は、西の仙人鉾山に、小さな用事がありましたので、黒沢尻で、軽便鉄道に乗りかへました。」と始まり、「汽車が、藤根の停車場に近くなりました。」「さよなら。」私は見送りました。その人は道具を肩にかけ改札の方へ行かず、すぐに線路を来た方に戻りました。その線路は、青い稲の田の中に白く光つておりました。そらでは風も静まったらしく、大したあらしにもならないでそのまゝ、霽れるやうに見えたのです。」と結ばれている。「私」が、黒沢尻で「本線」（東北本線）から軽便鉄道に乗り換えて、藤根の停車場に到着するまゝを描いた随想的小品である。

「私」が乗り換えた軽便鉄道は、大正10年3月25日に、黒沢尻〜横川目間が、11月18日には横川目〜和賀仙人間が開通した（東黄黒軽便鉄道）である。この区間には、明治45年に開業した、黒沢尻駅と仙人製鉄所を結ぶ和賀軽便軌道馬車株式会社の敷設した馬車軌道があった。当初は人力、大正2年以後には馬力で運転されていたものである。しかし、軽便鉄道の開業にともない、馬車軌道は順次廃止されていったのである。（官報掲載日付では、黒沢尻〜横川目村間の廃止は大正11年2月10日、横川目〜和賀仙人間の廃止は、同年3月22日である。）

新聞報道では、この軽便鉄道は「黄黒東線」と称され、（軽便鉄道）と表示されることはないが、当時の時刻表（『大正

十一年三月訂補 列車時刻表」鉄道省運輸局。「公認 汽車／汽船旅行案内」旅行案内社も同じ)では、「東黄黒輕便線」と表示されている。ちなみに、橋場線も、「橋場輕便線」と表示されている。輕便鐵道であつたことは間違いない。

この輕便鐵道の車室の大きさは、「貨物丁場」には「車室の中は、割合空いて居りました。それでもやっぱり二十人ぐらゐはあつたでせう。」と書かれている。輕便軌道を走つていた客車の大きさは、正確にはわからないが、人車時代には、「定員6人または8人乗り」(大野浩光「和賀輕便鐵道の成立と地域社会」(「鐵道史学」第4号、1986年)であつたが、下掲の『和賀郡誌』(大正8年9月)掲載の写真を見る限り、馬車時代になつてもさほど大きな客車が使用されていない。二十人が乗つて「割合空いて居りました」というような大きさでは到底ない。

この朝、「私」は、本線(東北本線)から仙人鉾山へ行くために輕鉄に乗り換えたが、現在のようにわずかの時間の待ち合わせによる接続にはなつていなかったようで、「私」が乗り換えてから、見知らぬ「鐵道工夫」に話しかけ「化物丁場」をめぐつてしばし話題が続いてようやく、「汽笛が鳴つて汽車は発」つている。しばらく時間があつたようである。

このとき、東北本線を利用して黒沢尻駅で輕便に乗り換えるには、東北本線上り列車ならば、黒沢尻着8時02分、下り列車ならば、8時03分着の列車がある。しかし、「私」といっしよに黒沢尻で乗り換えた「鐵道工夫」が雫石⇨橋場間の被害に言及しているところから、この「工夫」は、盛岡方面からやつてきたと考えられるから、東北本線上りを利用していたのである。これから乗り換える、東黄黒輕便鐵道の列車は、8時15分発。本線と連絡がある次の列車の発車は、11時25分である。雨の上がつた朝の発車であるから、この時の輕便鐵道は、8時15分発の列車ということになる。



この列車の、5.2哩離れた藤根駅への到着時刻は、8時34分。「化物丁場」は、わずか30分にみたない時間の物語であったのだ。それにもかかわらず、もう少し長い時間の物語と感じられるのは、「化物丁場」をめぐる話題の情報量の多さによるのだろうか。

この日は、「五六日続いた雨の、やっとあがった朝」で、車室内の話題は、「昨日までの雨と洪水の噂」で持ちきりで、さらに「狐禅寺では、北上川が一丈六尺増した」し、「宮城の品井沼の岸では、稲がもう四日も泥水を被つてゐる」と、具體的な地名もあげられている。

「私」が乗っている軽便鉄道が、大正10年3月以降に開通したものであり、稲が青く、水をかぶるくらい伸びている時期であるから、この洪水は、大正10年初夏以降の災害ということになる。『岩手県災異年表』（日本積雪連合岩手県本部、昭和29年10月）によれば、大正10年初夏には洪水はないが、翌11年には「風水害 七月下旬及九月上旬風水害あり」という記述がある。

この時の風水害は、岩手日報では、11年7月30日付の朝刊五面に次のように報じられている（適宜句読点を補って引用する）。

県下各河川増水す／別段被害はない（見出し）

二三日来の豪雨に県下大小の各河川が二十九日朝に至つて俄然増水した、昨日午前中各地よりの報告を綜合して見るに（略）北上川明治橋下に於て午前十一時三十分の観測は九尺であつた。それから雫石川市外三ツ谷太田橋附近にあつて午前七時頃約七尺であつたのが刻々水嵩を増し十一時半八尺に達したが、今度の出水は主として西根山系を中心に出たもので雫石川に於てこんなに増水を見ることは全く珍しいことであり大正六年九月以来の大洪水であると県土木課も言つてゐる。従つて県南地方も午後から増水の模様あり。北上川狐禅寺の千歳橋は消防組員等出動して警戒に努めてゐるが多分吊り上げることゝなるであらう

この記事中で、千歳橋は吊り上げることになるといふのは、大正11年まで千歳橋は船橋だったからである。翌12年には兩岸に橋脚が造られたので吊り上げなどはできなくなる。

車内で、〈化物丁場〉をめぐって話が始まったのは、「線路工事の絆纏を着た」人の、大きな声で問わず語りに語った「雫石、橋場間、まるで滅茶苦茶だ。」という言葉に、「私」が「あ、あの化物丁場ですか、壊れたのは。」と問いかけを發したことからだが、実際この7月下旬の洪水では、橋場線に被害があつたことが報じられている。8月1日（火曜日）の記事は次の通り（適宜句読点を補って引用する）。

鉄道被害／橋場線不通（見出し）

夜来の豪雨にて雫石川は最も氾濫し厨川村附近一帯は、沼田と変じたが橋場線は本線との分岐点附近崩壊し三十一日より全然不通となつた。目下工夫を督して復旧工事中であるが本日も尚開通の見込立たず工事を急いでゐる。

翌2日には次のように続報された。

橋場線復旧／但し一部は依然不通

昨日洪水のため不通となつた橋場線は昨日盛岡雫石間の復旧なり、終列車午後六時四十分より開通することとなつたが雫石橋場間は復旧迄には二三日は要すると。

（岩手毎日新聞大正11年8月2日付朝刊三面掲載）

橋場・雫石間は、8月2日現在においても復旧できなかつた。「工夫」の「滅茶苦茶だ」という言のとおり状況であつたのである。

さて、以上のような7月下旬の「五六日続いた雨の、やつとあがつた朝」は、もう少し時間を限定することができるであらう。この日は、「黄金の日光が、青い木や稲を、照してはるましたが、空には、方角の決まらない雲がふらふら飛び、山脈も非常に近く見えて、なんだかまだほんたうに霽れたといふやうな気がしませんでした。」と描かれるような天気であつ

た。また、後には、

「また風になりますよ。風がまったく変です。」私は工夫に云ひました。

その人も一寸立つて窓から顔を出してそれから、

「まだまだ降ります。今日は一寸あらしの日曜といふ訳だ。」と、つぶやくやうに云ひながら、また席に戻りました。

とも書かれています。また、末尾の、「そらでは風も静まったらしく、大したあらしにもならないでそのまゝ、霽れるやうに見えるのです。」からは、その後、案に反して再び風になったことが伺われる。この頃の天候は、変わりやすく、豪雨と晴れ間を繰り返していたが、7月の30・31日は、「三十日午後は鋭い陽光を雲間から浴びせて居たが、夜九時頃より再び豪雨襲来して暗澹たる中に電光閃いて物凄い夜景を呈し、翌三十一日午前一時迄は少しの小やみもなく降り続いた」（「岩手毎日新聞」大正11年8月1日付朝刊三面）と報じられる。それ以前には、「二十七日夜来の雨は翌二十八日正午になつて垂れ込めた暗雲よりぼんやりした陽光を認めたが夜に入つて再び猛然として襲来し車軸を流す様に降り出し一休みもなく二十九日正午まで続き近來稀な豪雨を催した」（「岩手毎日新聞」大正11年7月30日付朝刊三面）という記事もある。これらから、工夫の「今日は一寸あらしの日曜といふ訳だ。」という発言は、比喩でなく、まさに7月30日の日曜日を指していたと考えることができる。

このように、「化物丁場」に描かれている事象が、現実の大正11年7月30日（日曜日）の事象に重ね合わせることができるとするならば、少なくとも、「私」が、「鉄道工夫」から聞いた〈化物丁場〉の話にも、現実的な根拠があるということになる。

〈化物丁場〉は、橋場線工事中の、橋場・雫石間の一丁場の異名であり、「雨降ると崩れる」が、しかし「水の為でもない」という、不思議な工事現場のことである。

「私」は、「一月の六七日頃」に橋場を訪れたが、その時に春木場で、初めて〈化物丁場〉の話聞いた。この一月は、

橋場線が竣工する直前、「鉄道院の検査官」が来た頃である。橋場線は、軽便鉄道として建設され、大正10年6月25日に盛岡・雫石間が開業し、大正11年7月15日に雫石・橋場間が開業して、全線開通した線である。なお、同年9月2日には、線名が軽便鉄道橋場線から橋場線に改称され、昇格している。「軽便鉄道 橋場線建設概要」(鉄道省盛岡建設事務所、大正11年7月31日発行)によれば、最終部第三工区の土木工事は、大正11年2月20日に竣工し、その後は鉄道省盛岡工務所の直営で「軌敷設及橋桁架設其他開業上必須ナル工事」が行われた。「私」が最初に「化物丁場」の話聞いたのは、大正11年の1月ということになる。

橋場線の全通は、非常な期待をもって迎えられた。開通前年の大正10年12月の岩手毎日新聞には、工事の進行状況が、大きく報じられている。

橋場線 全長十四哩七十鎖で雫石までは既に開通してゐるが、橋場まで十一哩二十鎖なる第三工区は、来年六月竣工の見込みで近く軌道工事に着手するはずである。(中略)橋場まで十一哩二十鎖即ち第三工区が開通すれば自然現在の橋場線の名称が変更されるであらう。この第三工区の工費は十二万七千五百円で鹿島組で工事されてゐる。土工が九分通り出来てあるから今年中に引渡すであらう。

(大正10年12月6日付朝刊三面)

また、岩手日報では、次のように報じられている。

橋場線 明年七月全通更に大曲まで(見出し)

又橋場鉄道に就いては未成線たる雫石橋場間三哩五分の工事は明年二月二十四日までの落成期限なるも事実上既に竣工したれば目下軌道引き延べ中なり即ち明年七月には開通するをみるべく之にて全線は全通する都合なるも橋場より大曲までは新に計画せる鉄道に拠つて連絡を保つ計画なる

(大正10年12月29日付朝刊二面)

この翌月には、既に「事実上既に竣工した」はずの建設現場で「化物丁場」の話聞き、橋場線が全通した7月15日の直後にまたその話題を耳にしたというわけである。

鉄道工夫の人が、話した「化物丁場」は、線路を敷設するための築堤が、さしたる理由もなく崩壊してしまふところである。工夫は、「思い切つて下の岩からコンクリー使へば善かつた」のに、「岩間組」の技師が少し急いで「下の岩からも、横の山の崖からも」水が湧き、「土も黒くしてしめつてゐた」ところに、直接砂利を盛つたから、いつそう崩れやすくなつたと考えている。この工夫が、「二度の崩壊を体験した後、鉄道院の検査官が言つたと聞いたのは、「よくあちこちにある、山の岩の層が釣合がとれない為に起る」という説である。これに対しては、現場の直感で「誰もあんまりほんとはしませんや」と否定的である。「私」は、前者の場合には、「その時汽笛が鳴つて汽車は発ちました。」と場面を転じ、後者の場合には「なるほど」と相づちを打つのみである。「化物丁場」になる原因としてどちらの説が、説得的かの判断を示したり、自説の展開はしていない。

先に引いた『軽便鉄道 橋場線建設概要』では、第三工区の工事概要を、

本区間ハ雫石川ノ支流ナル龍川ニ沿ヒ概ネ平坦ナル田野ヲ通ズルヲ以テ工事容易ナルモ十二哩七十鎖附近ハ山脚河流ニ突出セルト又橋場停車場附近ハ相当線路ノ高上ヲ要セシ為メ共ニ多少土工ノ見ルベキモノアリ

と記し、また、この「十二哩七十鎖附近」の地点を特に口絵に写真で掲げている（下掲写真）。ここにいう「十二哩七十鎖附近」が「化物丁場」であるかどうかは、なかなか特定しがたいが、「土工ノ見ルベキモノアリ」と特筆されている点、工事の難所であつたことが示唆されているのである。また、線路工夫の話から、春木

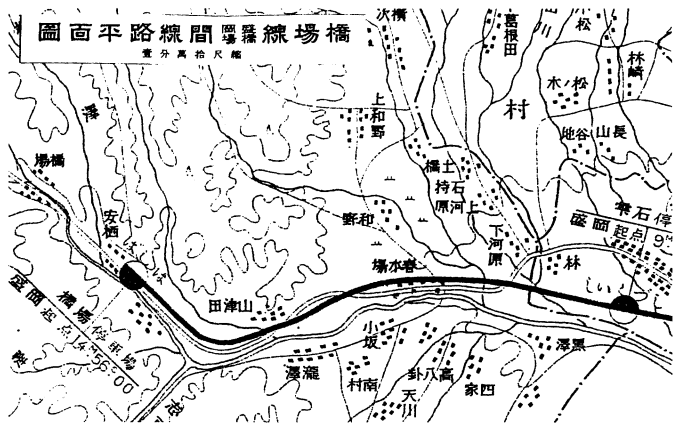


場・橋場間にあつて、山の崖が迫り、近くに雫石川の河原が白く広がっている地点であつたことなどから、ここが「化物丁場」であつた蓋然性は高いと思われる。そうとすれば、「山脚ノ突出」は、鉄道院検査官が述べたとされる説を裏付けて採用しているということになるうか。

地質学者の宮城一男は、「化物丁場」―工夫と「崖崩れ」を論ず」（『宮沢賢治 地学と文学のはざま』玉川大学出版部、1977・4）で、「化物丁場」の崩壊の原因を推測している。宮城氏は、橋場線が、洪積台地の末端部の崖の下を走っていること、洪積台地を形成する地層が、下半分が砂礫層、上半分が火山灰層であることに注目した。

化物丁場の崖は、きつと、その火山灰層と砂れき層との間に水がたまりやすかつた。そんなところは、工夫もいつていたように、えてして普段も、水がわいていることがおおい。そして、境の面をすべり面として、上の火山灰層がドドツと崩壊したのだ。もちろん、その崩壊は、このような崖を切り崩したことによって引きおこされたのだ。崖の表層部に樹や草が根をおろしているあいだは、たとえ、崩壊しやすい条件があつても、そうそう崩壊はおきない。やはり、切り崩しによって植生が根こそぎ失われたことが大きな原因だつた筈だ。

「私」が、書き手（宮沢賢治）であるならば、宮城氏のなしたような地質学的原因推定をなしても、不思議ではない。宮沢賢治の書いたものの中には、その土地の地質学的成因等に言及するものも多数あるからである。



「私」は、「どうしても、もっと詳しく化物丁場の噂を聞きたく」思つて、工夫に「話をやめてしまはれない為」に遠回りに聞いてゆくことさえして行く。しかし、「私」自身は、いっこうに、へ化物丁場への成因等に話題を導いたり、自らの推測を述べようとはしていない。地質学的にも非常に興味ある話題であるはずなのにである。

「私」の興味は、そこにはないのだ。「私」は、工夫の話聞きながら思い浮かべる。

私は、あのすきとほつた、つめたい十一月の空気の底で、栗の木や樺の木もすっかり黄いろになり、四方の山にはまっ白に雪が光り、雫石川がまるで青ガラスのやうに流れてゐる、そのまっ白な広い河原を小さなトロがせわしく往つたり来たりし、みんなが鶴嘴を振り上げたり、シャベルをうごかしたりする景色を思ひうかべました。それからその人たちが赤い毛布でこさえたシャツを着たり、水で凍えないために、茶色の粗羅紗で厚く足を包んだりしてゐる様子を眼の前に思ひ浮かべました。

後に「化物丁場」は、晩年になつて文語詩の題材に用いられ、次のような定稿が作られることになる。

化物丁場

すなどりびとのかたちして、 つるはしふるふ山かげの、

化物丁場しみじみと、 水湧きいでて春寒き。

峡のけむりのくらければ、 山はに円く白きもの、

おそろくそれぞ日ならんと、 親方もさびしく仰ぎけり。

この詩では、「成りてはやがて崩れてふ」（逐次形）へ化物丁場のありようではなく、そこに働く人々の姿が焦点化されている。詩人は、シジュフォオスの労働に重なるような、へ化物丁場へで働く工夫たちの労働そのものの、一断面を切り取つ

て見せることに、この詩の主眼をおいている。先の、「私」の心象に明滅する（化物工場）は確かに、のちの文語詩につながってゆくものである。しかし、だからといって、散文「化物工場」の「私」の関心をそこにとどめることは出来ないだろう。

実は、「私」が、工夫の話に直接反応するのは、もう一カ所ある。「成りてはやがて崩るてふ」まさにその現場を工夫が語ったところである。

「なあに、さうやって、やっと積み上ったんです。進行検査にも間に合ってたんで、監督たちもほっとしてゐたやうでした。私どももそのひどい仕事で、いくらか割増も貰ふ筈でしたし、明日からの仕事も割合楽になるといふ訳でしたから、その晩は実は、春木場で一杯やったんです。それから小舎に帰って寝ましたがね、い、晩なんです、すっかり晴れて申庚さんなども実にはつきり見えてるんです。あしたは霜がひどいぞ、砂利も悪くすると凍るぞって云ひながら、寝たんです。すると夜中になって、さう、二時過ぎですな、ゴーツと云ふやうな音が、夢の中で遠くに聞えたんです。眼をさましたのが私たちの小屋に三四人ありました。ほんやりした黄いろのランプの下へ頭をあげたま、誰も何とも云はないんです。だまってその音のした方へ半分からだを起してほかのものの顔ばかり見てゐたんです。すると俄かに監督が戸をガタツとあけて走って入って来ました。／『起きろ、みんな起きろ、今日のとこ崩れたぞ。早く起きろ、みんな行つて呉れ。』って云ふんです。誰も不精無精起きました。まだ眼をささないものは監督が起して歩いたんです。なんだ、崩れた、崩れた処へ夜中に行つたって何ちよするんだ、なんて睡くて腹立ちまぎれに云ふものもありましたが、大抵はみな顔色を変へて、うす暗いランプのあかりで仕度をしたのです。間もなく、私たちは、アセチレンを十ばかりつけて出かけました。水をかけられたやうに寒かつたんです。天の川がすっかりまはってしまつてゐました。野原や木はまっくろで、山ばかりほんやり白かつたんです。場処へ着いて見ますと、もうすっかり崩れてゐるらしいんです。そのアセチレンの青の光の中をみんなの見てゐる前はまだ石がコロコロ崩れてころがって行くんです。気味の悪いつたら。」

このように工夫の話を記した後、「その人は一寸話を切りました。私もその盛られた砂利をみんなが来てもまだいたづらに押し立てるすきとほった手のやうなものを考へて、何だか気味が悪く思ひました。」と感想を記す。自然の「すきとほった手」に対する畏怖が記されているのである。この後も工夫は、再び人為をあざ笑うかのような、「すきとほった手」の作業の話を繰り返す。そして、「今年はどうだめなんだ、来年神官でも呼んで、よくお祭をしてから、コンクリーで底からやり直せ」と言いながら働いていたと述べたうえで、この「すきとほった手」の作業をかううじて止めたのは、「すっかり被さった」雪であったと語られるのである。

このような話が、7月末の、予測もつかない自然の暴威の合間の、かろうじて陽光の戻った日曜日の車中で語られたのである。しかも、この陽光も、「大したあらしにもならないでそのまゝ霽れるやうに見えたのです。」とあるように、すぐに失われていった。人為を越えた自然への畏怖が、「化物丁場」の話と、この日の天象に響きあっているのである。そうしてみれば、「私」がこのテキストを語った関心の焦点はすでに明らかであろう。

ところで、このテキストでは、これまで考証したように現実の日時が特定可能であるにもかかわらず曖昧にされている。また、実際に「化物丁場」のある橋場線建設工事の第三工区を請負ったのは、鹿島組であるが、本テキスト中では「岩間組」とされている。このような書き手の操作は、現在の組織に対する配慮という側面があるのは疑いないが、しかし、それと同時に、岩手バージョンの「イーハトーブ」の地誌の一つとして、このテキストが機能することへの目論見とも読めるのである。